

令和3年度 産山学園共通実践事項+2

- (1)単元のゴールの姿(単元デザイン)
- (2)導入 **う** (問いやつぶやきを引き出している・子供の言葉でめあてを立てている)
- (3)展開 **ふ**・**や** (積極的なファシリテート・思考ツールの活用)
- (4)終末 **ま** (子供の言葉を生かしたまとめ・自らの学びや自己の変容がわかる振り返り)
- *効果的な場面で目的に応じたICT機器の活用
- *学習過程が分かるように整理された板書の工夫

校内研通信

No. 6

7月21日(水)
文責: 冨永

研究授業中研2nd (算数)

7月14日(水) 5年生 単元名「小数の倍」 授業者: 井 小裕里先生

<校内研の視点での分析>

○仮説1 について

単元終了時の姿を日常生活の中で生かそうとする児童とされており、日常場面と問題場面を重ね合わせることで、すべての児童が考えやすくなり、つぶやきを引き出していた。さらに、「どちらがより安くなったのか」と比較させたことで児童同士の思考のズレを引き出し、問いが生まれていた。また、あかうしどんの視点で振り返らせたことで、友達との対話で考えが変容したことを自覚したり、学びを日常へ生かそうと、未来向きの学びとなったことを自覚できたりした。

○仮説2 について

児童の発言を大切に扱われており、肯定的なフィードバックやまわりに考えを広げようとする問い返しがあり、思考を深めようとしていた。それにより、「0に近いから」や「1から遠いから」等、児童なりの算数言葉を活用し対話を活性化していた。また、数直線を常に活用されたことで、視覚的に子どもたちに訴えることにつながり、これを手がかりに自分の根拠として対話をしたり、目的に応じて数直線や図、式等のよさを生かしながら児童が選択して対話をしたりしながら思考を深めている姿があった。

<まとめ>

今回の授業研から、学びを人生や社会へ生かそうとするためにという視点から学びを考えていくことの重要性をより実感できたのではないのでしょうか。割合の単元は、学力調査等でも課題とされ、新学習指導要領では、4年生にも簡単な割合として入ってきています。差での考え方と商での考え方を比較させる実践や、数字を操作し計算を簡単にすることで、割合の考え方に焦点化していく等、様々な実践があります。中でも、大切なのが「1」とみる数の相対的な見方です。この見方は、算数のいろいろな場面でポイントとなってきます。普段の授業から、子どもたちにどんな見方をさせるのか(同じものや違うもの、変わらないものや変わったもの等)意識しながら教材研究をするだけでも、児童がその授業で獲得できるものに大きく影響しているのではないのでしょうか。

【自評】

「1」を基準にして考えることを徹底し、前時までに割合の3用法が使いこなせるまでに高めていたつもりだった。しかし、本時でめあての文末を「~~説明しよう」と教師側で設定したため、子どもたちの思考が停止してしまった。そこで、子どもたち側からどう説明すればよいか引き出そうと焦ってしまった。子どもたちの日常の自然な姿(わからないと発する雰囲気)を見せることができなかった。

